



TITLE:

近世の土地分給政策

AUTHOR(S):

本庄, 榮治郎

CITATION:

本庄, 榮治郎. 近世の土地分給政策. 經濟論叢 1925, 21(4): 629-633

ISSUE DATE:

1925-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128326>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二十一卷 第四號

大正十四年十一月一日發行

論叢

整稅案の一點點としての負債利子の問題……………法學博士 神戸 正雄

八幡船考……………文學博士 新村 出

矢内原「アダム・スミスの植民地論」を讀
教授の「アダム・スミスの植民地論」を讀……………法學博士 山本美越乃

南京條約の以前の治外法權問題に就いて……………文學博士 矢野 仁一

フツサールの現象學……………文學博士 米田庄太郎

自殺統計論……………法學博士 財部 靜治

時論

勞働組合法案を評す……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

リカアドに於ける勞働價值法則の妥當性に就いて……………經濟學士 森 耕二 郎

雜錄

近世の土地分給政策……………經濟學博士 本庄榮治郎

都鄙別による離婚率……………經濟學士 岡崎 文規

（禁轉載）

雜 錄

近世の土地分給政策

本庄榮治郎

徳川時代に一般農民の生活が極めて窮迫せるものなりしことは、既に屢述べた處であるが、然し農民の中にも地主大百姓として相當餘裕ある生活をなせし者もあつたことであるから、農村における貧富の懸隔といふことも勿論存在したことゝ思はれる。熊澤藩山は『富有の民五十家百家の中に一二家有を以て』云々といひ、『世事見聞録』には『有徳人一人あれば其邊に困窮の百姓二十人も三十人も出來』、裕福なるもの一人が『大勢の徳分を吸取て』榮華をなすと述べて居る。¹⁾『勸農策』にも『豪富の者と申は十ヶ

村に一人か二人にて御座候。又借銀も不仕、身上程候に渡世仕候もの百家の村に十人には過不申候。殘る九十人は皆困窮の小民にて御座候』と説いてゐる。大農小農の標準も一定せず、時代も場所も異なることであるから、之れによつて大農小農の割合を示すを得ずとするも、兎に角大農と小農とがあつて、農村に於て貧富の懸隔の存せしことは明かである。

農村に於てかゝる貧富の懸隔を生じたことは、或は酒油店商質屋金貸等の農業以外の利得によつて生じたものもあらう。²⁾或は上田の所有者又は勤勉なりし者が最初多少の富を積み、それが基となつて益富むに至りしものもあるであらう。而して一度び基礎が出来れば、あらゆる機會に種々なる事情から、或は積極的に或は自然的にその富が益堆積さるゝに至るものである。この富の力によつて殊に土地の兼併が行はれ、而も富有者は常に負擔輕き良田を安く買入れ、貧窮者は負擔の重き下田を所有するに至りし事實は、當時の多くの著書に散見する所である。

1) 集義外書 (日本倫理彙編卷一)
2) 寫本、卷二、下
3) 日本經濟書卷二十、586頁
4) 勸農策、前掲、585頁

この土地の兼併を防ぎ、農村における貧富の懸隔を取り除かんがために、當時種々なる方法が行はれたものである。田畑永代賣買の禁止も、分地の制限も、或は又地割制度も、それがためであると思われる。然し更に極端なる方法としては、土地分給の政策である。而してその政策が徳川時代では二三の藩に於て實行せられたのであつた。

二

土地分給政策を實行せしものとして從來知られて居るものは、對馬藩、藤堂藩及び佐賀藩である。

對馬藩のことについては陶山鈍翁の著「口上覺書」に「御國鄉村の田畠木庭、昔は百姓代々の持傳へに仕り、寛文四年に物成を定免^(法租)」に被仕付候時迄も其通に仕らせ被置、寛文十一年に地分け有之候節、百姓持傳への地面悉く取上げに成り、其村の百姓等分に請込候格に相極り候」とあることによつて、土地分給の行はれた

ことは明かである。而して地分け以前の從來の制度の利害を論じたる後、地分け以後の新制度の利害を説いて曰く「地分け以後の利は貧民も村並に地面を請持、富民も自由に買込候儀不被成、公役を勤候百姓の數其以前よりは増し申したる所にて御座候。其害を考候に面々請持の地面にても、以前より代々持傳へ候時程には大節に不存、以前富民の持候地面の作り子に成り居申たる時の心の様に有之、御郡奉行より折々の下知無之候得は内證の地分けを仕り候村有之所にて御座候。然其内證の地分けを堅く被禁、地分けを仕直し不申候で不叶村計吟味相極り候上にて地分け仕らせ被申、云々」と。これに由て觀れば、その實績に於ては未だ十分ならざる處あるにもせよ、土地を分配しその所有權を農民に與ふるの制度が實行されたことは明かである。

次に藤堂藩に於て行はれた分給策については「勸農或問」に「近年伊勢の藤堂氏にて是を行ひ、大に百姓の亂を激せし事、面のあたり聞及ぶ所なり。^(略中)藤堂氏の吏、兼併を破る事あまり卒

爾になせし故、貧民初は悦びたれども、貧者は愚昧多く、富者は狡黠多き事定まれる勢なれば、富民謀を合て金銭を閉て出さず、借貸の道塞がりしかば貧民亦すりきりて困りたるに、富民の資産を奪はれて怨望せる者ども、此機に乗じて貧民の愚者を煽動せしかば遂に亂をなせしと也』と説いて居るが、「一話一言」によればこの百姓一揆は寛政八年十二月に起つたことであり、その原因は『別て困窮の在所三十二ヶ村へ地平均申付候まゝ、是は其村の惣高を御上へ不殘召上られ、百姓貧福を不分、甲乙なしに平し、田畑割合に作らせらるゝ趣被仰出候處、甚以百姓方上下とも歸服不仕』遂に寛政八年十二月廿六日夜百姓一揆が勃發するに至つたのである。¹⁾

次に佐賀藩に於て行はれた分給政策については小野武夫氏の調査にかゝる「舊佐賀藩農民土地制度」に詳しく論せられてゐるが、それは、鍋島閑叟公のとき、嘉永文久の兩度に土地分給策を行つたのであつた。それより前天保十二年以後に加地子米(小作)米²⁾輕減及び猶豫などの政策

が行はれたが、それだけでは未だ小作農救済策として十分ならず、一層斷乎たる處置を採るの必要に迫られ、遂に嘉永五年に皿山代官所管内の耕地を沒收して農民に分配し、文久元年これを藩直轄地全部に推し及ぼしたものであつた。その分配の割合は従前三十町歩以上所有したる地主には六町歩、其他の地主には所有地の二割五分を與へ、殘餘の土地は悉く之を其當時現在の耕作者に分配したものである。小作人はこの土地分給政策のために經濟的窮地より救はれ、地主小作人の地位は漸く顛倒するに至つた。

三

以上の諸例は從來知られて居た所のものであるが、文化十三年武陽隱士の著「世事見聞錄」によれば、同様の例は會津藩にも行はれた如くである。³⁾ 即ち曰く「十ヶ年以前奥州會津領のものに承りしは、彼領分も近來福民貧民悉く偏り、其内貧民多く出來て既に潰百姓其餘多出來り行勢なるに依て、領主にて改革を行ひ富民の所持

1) 同叢書卷二十、147頁
2) 新百家說林卷四、817頁
3) 寫本、卷二、下

四

せし田畑を取上、貧民に割與へ、村別に無甲乙やうに貧福平均したると云。」と、即ち分給策が實行されたものであるが、その結果は如何、曰く「一體右の會津領は往昔より人氣荒々敷漸ともすれば一揆を起す風にて、此以前も國內一統用金を宛し時一揆發り城下迄も押詰、手に餘りし事有之由、此度も定めし騒動すべき事と覺悟して右の制度を始しに、何の様子もなく、貧民ども魚の水を得たるが如く、愁苦の胸を開き、たゞ明ても暮ても仁政の難有を唱へ、舞踊りて喜びあへり。又他國へ出しものも追々歸り來りて安住せしと也。又富民共は折角取集たる田畑を取上られ、福德を失ひ、大に耻辱に逢たる顔色をして事濟しとなり」と。私はこの事實を更に詳細に論證すべき他の史料に接する能はざるを遺憾とするものであるが、右の記事に誤りなしとするならば、會津藩内に於ても分給政策が行はれ、それは多分寛政享和前後の頃なるべしと考へられる。

以上四藩の分給策については十分詳細にその顛末を明かにし得ざるものもあり、またその結果より見て、藤堂藩の如く失敗の歴史たるものあり、會津藩、佐賀藩の如く大體に於て貫徹し得たものもあつた。各場合について其事情を異にするから一概には論ずることは出来ぬ。

當時の學者の所論を見るに、土地の兼併を非とし農村における貧富の懸隔を防ぐべきことを説けることは、多くの學者の一致する所であるが、然し如何にしてそれを實現すべきかの方法については種々なる意見があり、殊にこの土地分給政策の如き方法に對しては、これを批難せるものもあつた。例へば武元立平は其著「勸農策」において「俄に兼併の弊を止んと仕候ては、豪農富商共の田地を削奪し、小民に返し與へ候様の説も御座候得とも、是は彼德政と申す仕方よりも理無様に奉存候。本價を出し買集め候田地を其あたひを償ひ候て取戻し候は莫大の銀數

にて逆も出来不申、又故なく田畑を奪ひ候は、豪民共一向服し不申、亂を興し候様にも可相成、殊に今の無力の小百姓共、自分持株田地をさへ作り兼居申上、俄に田地を返し與へ候ても所詮得作り不申、却て散田^(荒地)を多くこしらへ、困窮の基に相成可申候」と論じ、分給策の實行に反對して居るが、それと同じく「世事見聞録」の著者も、會津藩の事例に對して、右の制度は善政にはあれども政道の本意に違ひし仕方なりとし、遠國邊鄙の者は一徹短慮なることをなすものと批評して居る。私は敢て茲に右の分給策の是非を論ぜんとするものではない。たゞ右等の事實、殊に従來あまり注意せられざりし會津藩に關する事例を紹介せんとするに過ぎぬ。

五

終りに注意すべきは、右の土地分給策は所謂地割制度とは性質上全く別物なることは是れである。地割制度は土地を一定期間毎に適當に分割して、村民に其各部分を割り當て用益せしむる

ものであつて、土地は村民全體の共有であり、一定年限の來る毎に全部の割替をなすものである。然るに所謂土地分給策に於ては、一旦土地を收公したる後、之れを農民に分割し、其各人に其各部分の土地の所有權そのものを與ふるものである。従つて一定期限後に土地の割替を行ふ如きものではない。尤上述の事例中には、その顛末の未だ明らかならざるものがあり、後日詳細なる史料を得たる場合に、寧ろ地割制度に近きものもあるやも計り難しとするも、本質上に於ては以上の區別あることは明らかである。尙、右の分給策を以て均田法と稱する人もあるが、その分割の標準は必ずしも均一ならざるを以て、均田といふ言葉では或は誤解を生せんことを虞れて、私は土地分給策なる言葉を用ゐた次第である。